ニュース

探検の殿堂と早田文蔵博士（木村陽二郎）

Yojiro KIMURA: Explorer Museum and Dr. Bunzo HAYATA

このたび西堀栄三郎記念「探検の殿堂」Explorer Museum, Nishibori Eizaburo Memorial が西堀氏のゆかりの地，滋賀県洲東町に設立された．南極・ヒマラヤ探検のパイオニヤーである西堀栄三郎を記念して洲東町町長西堀茂平氏が建てられたものである．場所は〒527-01 滋賀県愛知郡湖東町大字横溝419, Tel. 0749-45-0011, Fax 0749-45-3556である．八日市インターチェンジから車で10分のところで，鉄道ではJR東海道新幹線米原駅でびわこ線に乗りかえJR角能線で30分，又は近畿鉄道八日市駅下車，バスで10分である．月曜日と休日の翌日は休館日である．入場料300円，南極体験ゾーンは400円で寒さマイナス25℃の部屋で迫力ある映像が楽しめるという．

西堀栄三郎記念室は彼の偉業の紹介にあてられているが，「探検家の殿堂」はそれぞれの画家によって新しく画かれた各地域への日本人探検家49人の肖像画が飾られている．49人の探検家を選ぶにあたっては梅棹忠夫氏が委員長となり，吉良龍夫，近藤良夫，樋口敬二，本多勝一の四氏が委員として協議されたのである．歴史的人物として知られている最上徳内，近藤重蔵，高田屋嘉兵衛，間宮林蔵，伊能忠敬，松浦武四郎，ジョン万次郎，榎本武陽はもちろん49人の中に入っている．

ここでは植物学者の名をあげると木原 均，田代安定，早田文蔵，金平亮三，中尾佐助が挙げられている．実は早田文蔵博士の資料をNHKの某氏にたのまれて昨年送ったことがあった．早田博士の資料は東京大学理学部附属植物園からも送られ，肖像画は植物園所蔵の肖像も参考にして新らしく描かれたと聞いている．早田教授の小石川植物園での最後の講義をきいたのは私たちのクラスであった．このたび，開会式が昨年（1994年）8月3日に行われ，その際，早田先生の長女の秋山幸子夫人は娘さん夫婦とこの式に参列され，私の資料提供を知って御便りとNHK出版，制作の『日本の探検家たち－未知への挑戦』を送って下さった．

この書はおそらく開館記念に関係者に贈られたもので，110ページ，頁の偶数ページ面に探検家の簡単な伝記と各人の肖像を担当した画家たちの感想文があり，相対する奇数面に色彩刷りで描かれた肖像画があって貴重な記録となっている．なおこれらの事柄についての問いあわせは「探検の殿堂」あてになされたい．

早田先生の台湾産植物への関心は高等学校生のとき台湾へ旅行するという熱心ぶりだったことが秋山夫人によって知ることができた．

追 悼

北川政夫博士を偲ぶ

Professor Dr. Masao KITAGAWA 1910-1995

博士は本年8月4日長い療養生活の後，肺炎で逝去された．84歳を越えておられた．その生涯には非常な起伏があった．大連市（遼寧省旅大市）の生まれで，これが博士の一生を決定したかのように見える．同市は遼東半島の南端に位置し，南満州鉄道（通称満鉄）の起点であり，日本の軍部を中心とする“満州経略”（？）の起点であった．北川博士はここの州立中学（旧制）を卒業し，弘前高校（旧制）を経て，東大理植物学科に入学し，更に旧制大学院の約5ヶ年の学生生活を享受した．私より一年の先輩で，早熟の学者であったから，教えられることが多かった．東大では中井



The late Professor Dr. Masao KITAGAWA (1910-1995)

猛之進先生の指導を受け，大学院生の身分で先生の第一次満蒙学術調査団に参加して大いに活躍した．その報告 Pt. I～IIの植物学部門のI～II，IV編（1934-1936）に博士の報告が多くある．その余は植物学雑誌に満州植物新知見（1933-1937）I～X，更に日満産セリ科小記（I～V），植物学雑誌 1937-1938，本誌 1941-1947に精力的に発表した．以後「東亜植物断想録」の表題でI～XXXIII（本誌 1943-1980）が断続的に続く．Neo-lineamenta Florae Manchuricae 715 PP.(1979) はドイツのJ. Cramer出版社，宮脇 昭，Tüxen両教授の斡旋による．これは博士の総決算ともいうべきものか，植物種，および以下のランクを分類別に配列し，異名，和名，分布その他を編纂したもので，新意見を含む．博士の体の衰えのためか，海外出版の困難さのためか，誤植なども目に付いたが，ソ連邦，中国の新文献も引用し，日本の暗黒時代を抜け出し，国際性が持たせてある．書評は原 寛，金井弘夫両博士の手による（本誌 **55**: 44, 1980)．金井氏によると「概してタクソンは小さ目な感じがする」とある．私も同感であるが，依然としてこの方面の大著たるの面目がある．博士は一貫して"満州"（熱河省を含む，当時）の研究に打ち込み，"北支"（あるいは華北，当時)，朝鮮半島，日本の植物に触れることは少なかった．博士の粘り強いこの一貫性は私など凡俗の到底及ぶ所ではない．

博士の官庁的な経歴を見てみよう．1935 大陸科学院研究士．1937 同副研究官．1937 理学博士（東大)．1939 満州国，国立博物館学芸官併任．大陸科学院研究官．1946 10月内地帰還．1947-1950 農林省関係の研究所の嘱託，研究員など．1950 横浜国立大学教授．1971 同大真鶴理科教育実験所所長兼任．1975 横浜国大定年退官．これを記念して博士の文献目録（1926-1974）出版（1975)．博士の御健闘の跡を偲び，御冥福を祈ること切なるものがある． （津山 尚）